

# 河芸町千里ヶ丘における小地域福祉活動

## Local Welfare Activities in Chisatogaoka, Kawage-cho

佐藤 完  
Tamotsu Satou

### (要約)

平成20年3月28日、厚生労働省老健局計画課の「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議（「孤立死」ゼロを目指して）」において報告書が公表された。厚生労働省は、「孤独死」とは表現せず「孤立死」と表現しているが、一般的には「孤独死」である。千里ヶ丘における安心・安全・安寧な地域づくりに向けての経緯・現状・課題を探るものである。

### (キーワード)

孤独死、コミュニティケア、地域福祉活動、福祉教育

### はじめに

平成18年1月1日、河芸町は、津市、久居市、芸濃町、美里村、安濃町、香良洲町、一志町、白山町及び美杉村と合併して、新「津市」となった。合併前の河芸町は、県営住宅が作られる際に下水道を既存の河芸町のものを使用する事を認め、今後の新興住宅地として町の発展を期待した。しかしながら、団地が作られてから45年を経過した現在は、当時30歳前後で入居された方々も75歳前後となり高齢化が進んでおります。千里ヶ丘地区の高齢化率は、平成19年9月30日現在で30パーセント、平成22年6月30日現在では、高齢化率が37パーセントとなっている。3年間で7パーセント増加という急速な高齢化が進んでいる。団地の標高が、国道23号線（21<sup>㍉</sup>）、公民館付近（21<sup>㍉</sup>）、鈴鹿国際大学付近（42<sup>㍉</sup>）であり買い物に不便な地域でもある。

平成19年8月、道路の木陰で座って休んでいる高齢者（熱中症？）に近隣住民が気づき、民生委員と管理人が安否の確認をしましたが、5日後、民生委員が自宅を訪問した際に、部屋からテレビの音がするが、応答はなかった。近隣住民からは、「テレビがずっとついている」とのことであった。民生委員から連絡を受けた親族が、駆けつけるとトイレの中で亡くなっているのを発見される事案があった。又、平成20年5月には、単身の男性71歳宅の郵便受けに新聞がたまっており、近隣住民が異変に気づいた。親族が、自宅の中で亡くなっているのを発見する事案が起こった。この人の場合も、一早く異変に気づいたのは、近隣の住民であったが、この地区においても民生委員のなり手が無く不在となっていた。民生委員が不在の地区で繰り返し孤独死が起きていることに危機感を抱いたのが、自治会と地区社協であった。一般的には、県営住宅のある地区の個別の問題だとなるが、千里ヶ丘は、校区で「自分達の住まうこの地区を守ろう」という機運が生まれた。さらに、平成21年5月には、老夫婦の介護心中の疑いのある事案が発生した。夫72歳、妻66歳、病気の妻を夫が長年介護していた。当団地の初期からの住まれる住民であり、夫婦の姿を見かけないことを近隣住民は心配した。たまたま訪れた親族

が部屋の中で亡くなっているのを発見された。この事案の場合も、一早く異変に気づいたのは、近隣の住民であったが、この地区においても民生委員のなり手が無く不在であった。

### 地域住民の立ち上がり

千里ヶ丘自治会は、千里ヶ丘を安心と安全な町にすべく地区社協に「ほっておけない生活課題」をなんとかしようと地区社協と協働する。津市社協河芸支部の主任である伊藤淳と協議をした。平成20年6月8日に、地域に住まう住民に現状の問題意識の確認をすべくNHK放送局に依頼し、先駆的な取り組みをした「千葉県松戸市琴平団地の実践『一人団地の一室で』と『ご近所の底力』～問題解決にむけての実践報告～」の二本を上映し勉強会を開催した。問題の意識化は出来たが次に何をどういう手立てで取り組むか可視化できずにいた。

平成21年2月に津市社協河芸支部の伊藤さんより相談があった。早々に伊藤さんにアンケートの実施を確認し、上映会報告会を開催した。上映会に参加していただいた方たちのほか、市の福祉課の職員も参加しアンケートの報告を材料に意見交換を行った。意見交換では、「孤独死は行政の問題」「自治会に押し付けられても困る」「行政の責任でやってほしい」という意見がある一方、「市の職員さんを今の倍に増やしたら、私たちの地域の問題をすべて解決してくれるのか」「住民にできることはここまで」「行政と協働でできることは何かと考えることが大事ではないか」といったやりとりがあった。それぞれ思惑の違いがある中において、自治会連合会長から「団地は、いろんなところから集まっている集合体の地区で、お互いの絆が弱く、その中で孤独死が起きたのだと思う。私たちはある意味辛い立場にあります。辛いという字に横棒「一」を加えると「幸」という字になる。皆で知恵を出し合い、何か一つの事を決めて努力しよう。この会合では、地域住民の潜在能力の高さを伺わせるエピソードがある。県営千里ヶ丘団地は、高齢者だけの問題だけではなく在留の外国人の問題もある。アメリカ発のサブプライム問題が起こり、派遣社員の大量リストラが行われた。当然ブラジルから来られた方々を、「日本の景気が一気に悪くなったから母国に帰れと言えるか。日本人として、日本が苦しかったときに新天地ブラジル等に移民したのではないか」と発言された地域の方がいた。この地区の「そうそうたる人たちがこの場に居ます。これだけの人がいれば何でもできますね。」と発言し住民主体の活動に取り組むことを決めました。さて、地域に住まう人の潜在能力の高さを確認しつつも次の仕掛け（呼び水）をどうするかを考えるまもなく伊藤さんより、地域の方が「サロンを始める」と言っている。津市内でも先駆的にされている銭山団地のサロンを見学に行ってきた。サロンを始める事は、地区社協、自治会等々で決めた。

### 千里ヶ丘「きっさ わらい」の開店に向けて

サロンは、手立てであり、他にもあるかもしれないがサロンを開くという地域住民の活動の支援や助言を行うこととした。本活動を社協とともに活動を見守りつつ必要に応じて協議を重ねることを通底し、本来の目標である安寧な町づくりに結びつけられるようにすることを地区社協とも確認をする。カーナビゲーションのように目的地まで住民の生活リズムで誘導するのが私ども（社協・本学）の役割であり、

時に活動の中で休憩や寄り道を認めた支援や助言を行うこととした。活動の実施主体は地域住民であり、社協や短大は黒子に徹することとした。社協職員や短大も地域住民の視点から見たら「所詮はよそ者」であり、問題解決は地域に住まう住民の手にあることを念頭に置いたかわりとした。

平成21年5月 千里ヶ丘地区社協役員会開催を開催し、具体的な活動を計画するため、地区社協の役員会を開き、第一歩の活動として、ひとり暮らしや近所づきあいの少ない高齢者に気軽に足を運んでいただける「場」を作ろうと、手作りカフェの活動を計画した。名称は、「わらい」声がたくさん聞こえてくる場所にしたいという思いを込めて「千里きっさ 『わらい』」とした。60歳以上は100円、60歳未満は200円で誰でも気軽に参加可能であり、事前に校区内に各戸に配布用のポップちらしをカラー版手書きとすることにした。場所は、千里ヶ丘のほぼ中心に位置する学童保育児童クラブ「ひまわり」を借用することとした。各地区の掲示板には、A3サイズに拡大したチラシを掲示し広報啓発を行った。民生委員の方にもお願いしチラシの配布を行う。事前の打ち合わせを兼ねて河芸支部の会議用のテーブルが円卓であったので、会場のテーブルを円卓にできなかつ検討して頂く。サロンでは「上座も下座もなく誰でも気楽に」を念頭に置くと円卓が欲しいと考えた。結果的には、河芸支部に円卓があり、会場に持ち込んだ。後に円卓は、来店者の過ごす時間が多くなり回転率から考えると無駄の様にみられるが、本来の目的の一つの手立てとしてゆっくり過ごして頂くには必要なテーブルであった。

平成21年6月 放課後児童クラブにて手作りカフェ「千里きっさ わらい」開店した。団地住民だけでなく、校区住民のふれあいの場であり、高齢の住民の様子を知る情報収集の場も兼ねることを意識し開店した。放課後児童クラブのホールに丸テーブルを4台置いて、1テーブル8人が座れる。丸テーブルであることが、改めて大事なことだとわかった。会議用の四角いテーブルだと、端と端の人は顔を合わせて話をするのができないが、丸いとどの位置の人の顔も見ることができ、人の輪の中にいる雰囲気ができる。又モーニングセットを用意していますが、食事の提供が、目的ではなく、一人で来られた方が、黙々と食事だけをして帰ることがないように、各テーブルに民生委員が入り、声をかけたり、話を聞いていただく様にした。「わらい」は、ふれあいの場であり、情報収集の場である。男性の方も来店し、民生委員が声をかけ、男ばかりで話がはずんでいる。外では自治会長が来られた方の対応をする。来られた方は、中にいる民生委員が出迎えを行う。

放課後児童クラブは、公園の中にあり、ピクニックテーブルを出して、混雑している際の待合所でもあり、外でも談話ができるように工夫している。来られた方たちが、時に自治会長と話をし地域の課題の情報収集の場となっている。又、自治会長や民生委員、市の職員、社協のケアマネが集まって談話し、支える側にとっても、「わらい」に来れば、地域の情報を収集することができ、近隣で起きていることをどうするか、解決に向けて話し合うこともできる場となっている。

この活動の計画当初から、高田短大の学生もボランティアをとして参加している。受付の様子ですが、若い人達が明るく声をかけてくれるので、来られた方も、嬉しそうに食券を求める。来られる方たちにとって、学生は孫くらいの年齢なので、男の自治会長や老人会長が対応するよりも嬉しいようである。また、学生ボランティアにできることとして、このような場所と参加する機会があるだけではだめだということがわかり、近所づきあいの少ない方たちにいかに繰り返して足を運んでいただけるかが反省

会の課題となっていた。この話を聞いた学生たちは、来られた方に季節感を意識したお土産をつくり、手書きで次回のご案内状を添える事とした。学生の出来る範囲で、身近な材料を使って創意工夫することとした。平成22年1月に具体化し、蜜柑をラッピングし蜜柑の下のコースターに次回への呼びかけと日時を記入した。2月は、3月を意識し、折り紙でおひな様を作った。これは、100個程つくり来られた方に渡した。余った分は、民生委員に託して、次回のチラシとこれを持って伺うことを考えたが、できばえが良く、お金を出しても欲しいと言われ16個くらいしか残らなかった。4月は、鯉のぼりを作り、鯉のぼりを立てる作業を来られた方とともにすることを企てる。来られた方は、お話をすることが主でありともに作業する場所と時間が上手くいかなかった。作っていた方は両手を合わせ「ありがとう」と言って持ち帰ってくれた。民生委員や自治会の役人に伺うと、学生の手作りの土産が、来られた方の下駄箱の上に飾ってある。学生達は意欲的参加し、2月の寒いときには、女子学生が受付をやりたい。来られる方の思いを外から直接かかわりたいとその都度、課題を持ってかかわり地域住民とともに「わらい」の一員として活動している。必然的に後輩が続き先輩の後姿を追いつつも、1年生らしい視点を持ってかかわっている。視覚障害の方をガイドヘルプしながら招くのも当初は2年生の役割であったが、1年生の役割となっている。

### 「わらい」の現状

「わらい」は、6月にはじまり、これまでに8回開催しました。千里ヶ丘団地を中心に、校区全体から

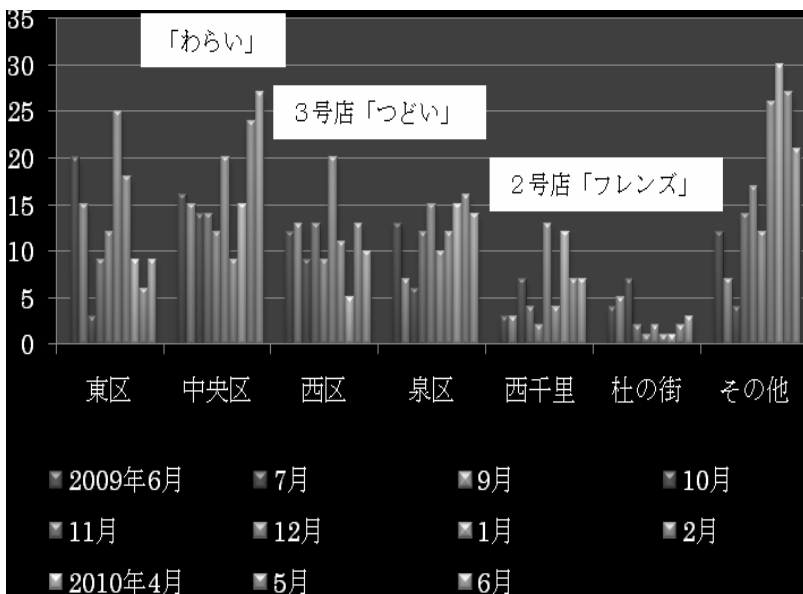


図-1 千里ヶ丘サロン 月別・地域別利用者数の推移

参加があり、活動に対する認知度は高まっている。回を重ねることにより、この場に関わる人たちに温かい心が通い合う様子が見られる。また、スタッフからは、「食事だけでなく、来られた方と一緒に手芸の活動もしたい」というような思いも生まれてきている。利用実績 2009年6月～2010年6月現在まで(8・3月休み) 延べ人数 868人 平均人数 72.3人である。

「わらい」という場は、招く側も招かれる側も相互に温かい心を持ち合う場であり住民の発意で運営され、地域の諸課題を共有しあう場となっている。改めて、公会堂を利用して「〇〇について・・・」と日時・場所を指定しなくても月の最終日曜日に「わらい」が開催されるので、そこに行けば自治会役員等々が居るので課題提供がなされる場となっている。

「わらい」はゴールではなく、一人でも最期まで安心して暮らせる地域をめざし、次のステップ「ク

モの巣づくり」に進みたいと考えている。「クモの巣づくり」は、地区社協の事務局長の言葉で、一般的にはネットワークと言われる。人と人とのつながりをクモの糸と考え、困りごとがひっかかるように、さらに細かいクモの巣を張っていく。困りごとが起きると、巣が揺れ動いてすぐに全体に伝わる。クモの巣には民生委員や自治会長という二本足のクモがおり、行政や社協というクモもいる。団地で起きた孤独死や介護心中の出来事で共通していたのは、近隣住民は様子がおかしいことに早くから気づいていたけれども、そこから先につながらなかった反省もある。困りごとを早期につかまえ、関係者にすばやく伝えて、解決を図る仕組みとして「クモの巣づくり」が必要だと考えている。しかし、第1ステップの「わらい」は、まだ様々な課題を抱えている。図-1からもわかるように西区、西千里の住民にサロンの拠点を置く必要性がわかる。

2号店「フレンズ」の開店は、平成21年10月には、「わらい」の2号店を開いた。「わらい」は中央区にあるので「遠くて不便、参加しにくい」という東区の住民の声があり、住民の近くでの開催は課題となっていた。経験的に半径400メートルから500メートルの距離に拠点が望まれるところであった。400メートルから500メートルの距離感は、地域にある公園の造園の際と同様な距離でもある。2号店では、この地区の民生委員が中心となり、有志とともに実行委員会を結成し、自治会や老人クラブ、子ども会と共同で運営している。この地区での準備会に参加した際には、近隣を歩くと「おはよう」と誰にでも声を掛け合う地区である。農業をされている方も多くあり、年に一度スイカの品評会を開催し、スカイを作られている方の楽しみの行事でもある。最近では、アパートも増えて地域住民でも知らない方が増えてクモの巣作りの必要性を感じての実践である。フレンズは、祖父母が孫を連れての参加が目立つ地区でもある。開催の当初は、座敷でもあり長机を並べての開催であった。

初回は、「ぜんざい」と「ぬか漬け」が出された。ぬか漬けは、独特の香りを有するので今時の若い家庭では食卓に上がらない。嫁と同居している家庭では、食卓に上がらないと高齢者は語る。ぜんざいを出したが、風邪を引いている子どもに食べさせようと、なべを持って来られた母親があった。次の日、スタッフの一人でもあった老人クラブの役員が、その子に元気になったか声をかける事のできる普通の関係性がある。3回目には、地元の大工さんが、ボランティアで子どもたちのために木工教室を開いた。2号店では、世代を超えた交流ができる場になっている。円卓も大工さんがボランティアで作られた。最近では、農家で作られた野菜を販売することも始めた。西千里地区の特長を活かした活動がされている。3ヶ月に1回のペースで開かれているのも特徴的である。

3号店の開店は、西千里地区は、「わらい」から離れており、3号店の開催が望まれていた。平成22年6月21日に試食会を開催し、3号店千里キッサ「つどい」開店をオープンさせた。3号店では、「わらい」に来られていた方が、招く側になった。招く側と招かれる側の関係の逆転現象が生じている。又「フレンズ」、「わらい」、「つどい」の各店をはしごしている方もいる。月に2回、近隣の方々と人の輪の中でお話をする機会となっていることもわかった。「つどい」では、テーブルは大工さんに依頼し手間賃だけで円卓を作って頂いた。「わらい」の場に遊びに来る小学生が受け付けの一部を手伝ってくれる関係も生まれた。「きづな」は、地域の高齢者が手押し車を利用して来られるのも特徴的であり、地域に住まう方々の近くにもうける必要性を改めて感じた。通りに面した集会場は、交通量も多く、「ま



いど」と言って大阪出身の方が交通整理を買って出てくれた。地域に住まう人の手で運営しようとする力が育っている。さらに、県営住宅のある棟の女性陣が中心となって、西千里集会所において「鶏の唐揚げ」をメインとしたお茶会が開催される運びとなった。一人暮らしの方が、鶏の唐揚げを3つ4つ食べるだけに油を引いて作るより、お総菜の鶏の唐揚げを買ってきた方が楽である。同じ棟の方々に声を掛けあって作る唐揚げは総菜では作り出し得ない味もあり、作り手の思いが幾重にも重なった香りを創り出す。「わらい」の様に立派にはできないが、地域に住まう人たちの小さな集まりが安寧の街作りに大きく寄与するに違いない。「わらい」に参加し、招かれる側から招く側へ攻守交代がされ、住民主体の活動に紡がれた実践こそが地域福祉実践と考える。<sup>1</sup>

### NHK スペシャル「無縁社会」の上映会の開催とクモの巣作りに向けて

平成22年4月27日 津市河芸総合支所防災研修室にて、同番組制作ディレクター稲垣淑子氏を招いて『“無縁死”3万2000人の衝撃』の制作過程の報告を受けて、千里ヶ丘の課題について改めて確認する事とした。<sup>2</sup> 2010年5月29日には、津市千里ヶ丘公民館支え合いの千里ヶ丘づくり講座～助けられ上手のまちをつくる～と題して、広島文教女子大学菅井直也教授をお迎えしてエゴマップによるクモの巣作りの勉強会も開く。地域住民における相互の関係性の可視化や地域に潜むタレントの発掘についても貴重な示唆を頂く。特に招く側と招かれる側の関係は、攻守交代があるのが普通の暮らしでもある。「わらい」が参加した後に帰りがけにお茶会が営まれている可能性の指摘も受ける。本年度本学科を卒業して、4年制大学社会福祉学部へ編入した学生は、今もって「わらい」に参加している。彼が久しくさせて頂いた方が一人で参加された。理由を聞くと、お友達が怪我をして今日は来られないとのことであった。彼は、その方が帰るときに送る届けるボランティアを買って出て。友達の宅に寄ってきた。そこで、怪我の具合を聞いたりしていると、その方を心配しているもう一人の方の存在があった事を確認する。フレンズでは、少し元気がない方と声をかわし、最愛の旦那さんを失って元気がなかった事を知る。今は色々な趣味をもたれて近隣お方々と一緒に趣味を楽しんでいることを聞く。フレンズを終えて帰るときに、その方のお宅にお邪魔した。陶芸もやられ食器を自作されていた。ゼリーを出されたが、その方の手作りでもとても美味しかった。と後日報告してくれたが、学生ボランティアとして、招く側が招かれる側に攻守交代している関係がそこにあることに身をもって学生も気づくのである。

千里ヶ丘の実践では、次の課題に向かうとき、必ず地域住民参加による勉強会をもって課題確認と解決への意識付けを行って取り組んでいる。「千葉県松戸市琴平団地の実践『一人団地の一室で』と『ご近所の底力』～問題解決にむけての実践報告～」、今回のNHKスペシャル「無縁社会」の上映会を企画し、住民に課題の確認をしつつ本来の目標である安寧な街作りに着実に進む努力もされている。

### 学生ボランティアの意義

学生ボランティア活動は、「ぼらんていあ津 2010 SEPTEMBER」にも本学学生が書いてあるように赤い羽根の共同募金等の一日で終わる活動が多かった。「わらい」は、企画や運営にかかわり「出会い」や「人のつながり」に魅力を感じているという。また、来られた方の笑顔が嬉しい。運営メンバーの

一員として認められ、今後の運営に当たっての意見も言える場でもある。<sup>3</sup>

学生にとってボランティア参加は、地域福祉実践の場でもあり、福祉教育の「学び」の場でもある。配膳や調理補助のボランティアから始まり、「わらい」に来られる方々の表情を感じ取りたいと冬の寒い時期の開催にもかかわらず受け付けをしてくれた女子学生の姿もあった。反省会の折りにリピーターを増やそうと意見が出ると、来られた方に蜜柑をリッピングして渡した。「わらい」の後、帰るときに渡す予定が、来られた順に渡すこととなった。頂いた方々は、誰一人ラッピングをほどくことなく大事そうに持ち帰ってくれた。後日、地区社協事務局長から、来られた方が冷蔵庫のドアに貼ったり、下駄箱上に飾ってあることを知った。お土産づくりから始まって「わらい」における地域住民と学生のかかわりは、相互に「学び」の場でもある。21年度卒業した学生が、「わらい」の終了後に開催される反省会の折に、「り・・・」と言って言葉に詰まる。普段学内では、「高齢者＝利用者」の関係が知らず知らずの間に概念化されていたことに気づいた。言葉に詰まった学生「り」は、利用者と言おうとしたが、高齢者と言い直した。介護福祉学を学ぶ者にとって、対象となる方々は、社会福祉サービスを利用する高齢者がネガティブな高齢者観を概念化させてしまった可能性は否定できない。

老いは豊かであって欲しいと願う教員の思いに反する。それ故に、課外授業（課目外授業：参加は自由であり、評価も行わないが、学生の出席率は高い）を設定し、本学の近隣に住まう元気な高齢者を実習棟に招き入れ、その方のライフステージに耳を傾けるのである。大病を何度も経験しつつも、病院のお話ボランティアをされ、身につけた和裁を伝授するなど元気に過ごされている方から貴重な体験を聞くこともボランティアを支える力となっている。中途障害で視力を失った方の生い立ちを聞き、視力障害の不自由さを改めて考える機会となった。その方は、白杖を利用して退院後に国道23号線を渡ろうとした。居合わせた高校生が、信号が青になると、「信号が変わったぞ！」渡ろうとするビルに向かって「さぁ〇〇に向かって行こう」と大きな声で言ってくれた。彼らは私が信号の色が分からないので声で教えてくれた。又、ある高齢者は、シルバーカーを押しながら「私も渡るから、さぁ一緒に渡ろう」と声をかけてくれた。その様な経験を重ね、何か皆様にお役にになれることをしたいと考え、得意であったハーモニカの演奏グループ「ひぐらしハーモニカ隊」と名乗って演奏会をしている。メンバーは、リウマチもありハーモニカを固定して演奏してくれる方も居た。教員が、講義の中で「ノーマライゼーションとは」と教科書的に語るのではなく、まさにノーマライゼーションという理念を踏まえて普通に社会貢献活動をしている姿を学生は内在化するのであろう。今年度もお越し願ひ、学生と共に演奏会を企画した。学生の心に深く内在するかけがいのない人の存在を学生の視点での表出である。最近、エコブームでハイブリットカーが増えてきた。視覚障害者の聴覚には、エンジンの自動車の気配は感じられるがハイブリッドカーの迫る音は聞こえないので困ると話されていた。エコであることも大事であるがノーマライゼーションという理念を包括したモノが求められる時代でもあり、その時代を切り開くのも学生達であることを念頭に置いた「学び」が必要である。<sup>4</sup>

介護福祉学を基軸に、具体的な高齢者のライフステージに耳を傾け、軸のまわりに地域に住まう人々の生活課題を共有しつつ、答えのにくい難しい課題に地域住民とともに課題に寄り添おうとする姿勢が生まれるのである。学生自身が、寄り添おう姿勢に自己を投影させ、自己覚知→自己選択→自己決定→

自己実現の過程を自身に内在する事が出来るのである。単に介護福祉学における机上の専門的な知識や技術ではなく、具体的な事例を持っての「学び」の進化（深化と新化）をする事が彼等や彼女等の人間福祉に対して熱くなる。<sup>5, 6</sup>

又、地域住民は、21年度卒業生に対して、日頃のボランティア活動に感謝の念を抱き千里ヶ丘地区社協より感謝状を卒業生に贈呈して頂いた。学生にすれば毎月の日曜日に当然のようにかかわって反省会の課題を学生なりに内在し少しでも解決に結びつけようと思つた結果に過ぎない。ボランティア活動は、先輩後輩の枠組みを超えて地域住民の創り出すリズムに波長を合わせれば、合わせるほどに活動の振幅は、倍加するのである。その波の中に心地よい自身の存在観を知り、人間形成の道程を感じ取っているのであろう。

「わらい」に関わることを通底して学生が「学び」を深める要因は、地域住民の交わりがある。地域に住まう人の佇まいを見聞することにより学生自身に内在する福祉観を問いだし、大きく変容するのであろう。介護福祉学を通した福祉観が、地域生活する方々と出会う。この出会いを八木誠一は、「出会った方々の純粋な好意に出会うとき、人はもっと深く人格の出会いを経験する。純粋な好意とは、他者を利用したり、敗北させたり、傷つけたりする気持ちの一切ない、他者を受容し、他者との共生を求める気持ち、他者の人格それ自身への敬愛である。出会った人が、人格とは何か、人格の出会いと交わりが何かを、知識ではない現実の出来事として経験するのである。こうした出会いは、法や道徳や理念のレベルを破り超える人格の交わりである。」と述べている。<sup>7, 8, 9</sup> 介護にかかわる専門知識でもなく介護援助技術でもなく「かけがえのない人」としての出会いであり、招きでもある。

鷺田清一は、「『学び』が『魂が打ち開かれる』あるいは『動かされる』経験だとすればそれまでのじぶんが打ち砕け散る体験をつねにともなう。」と述べている。<sup>10, 11, 12</sup> また学生であるが故に、壁にぶち当たり、つまづく、揺れる、迷う、壊れる・・・という体験を通底して「学び」が深化すると述べている。ベルクソンは、「彼らがただいるというだけでよい。そういう人のいるということが、そのまま招きになる」と述べている。学生が地域に住まう人に出会う。出会ってその人との「招きや佇まい、出会い」を通して、出会った人を受容し、その方との共生を求める気持ち、その方の人格それ自身への敬愛を知らず知らずに吸い込まれるように引き込まれ感化されるのであろう。そのような直接体験を通して学生自身のキャリアデザインを確かな像として描き出されることが「わらい」の場で起こっているのと考えられる。愛知教育大学の増田達郎は、人との関わりの深まりを「to, for, with, by, in (hand in hand) へ」と述べている。<sup>14, 15</sup> しかし、個々の学生内に内在する福祉にかかわる魂を育み、創れる福祉観が、「わらい」という場でボランティアスピリット（真のボランティア精神）に出会う場といえるのであろう。それは、制度政策からのボランティア精神ではなく、何ら見返りもなく、無償性と自発性の行為を通底して出会う直接経験と表現となり多様な学生の営みが紡がれる。このような関係は、福祉を學ぼうとする学生の内なる魂を揺さぶられ制度・政策・介護技術でもない福祉思想が熟成され、かけがえのない人との出会いとなって行く。10月31日に開催予定であった「わらい」が、台風の接近に伴って中止となった。河芸支部社協と千里ヶ丘地区社協は、中止の知らせを広報した。しかし、学生は、31日は晴天であったので朝、何時もの会場に足を運ぶ。中止の連絡が届かずに会場に来られると方もあると考



え出向いた。通常のオーガーストップの時間までおり、知らずに来られた方に10月の焼き芋のお土産を渡していた。中止の張り紙が一枚より、学生が待ち構え、学生自身の言葉で直接表現し対応しようとする学生は、地域を支える大きな力となるはずである。

## 地域と社協、短大の連携

千里ヶ丘の実践と市社協・短大との協働実践と地域住民・市社協・短大と協働のあり方は、平成21年2月に津市社協河芸支部の伊藤さんより、本学人間介護学科佐藤に相談があった事から始まった。そ

の後、平成21年4月28日付の社会福祉法人津市社会福祉協議会より、「地域福祉活動推進事業に伴う支援について(お願い)」の依頼があり、期日は、平成21年4月より、主催は津市社会福祉協議会河芸支部、目的は、一人でも最期まで安心して暮らせる地域づくり、内容は、本事業への活動支援及び指導助言として

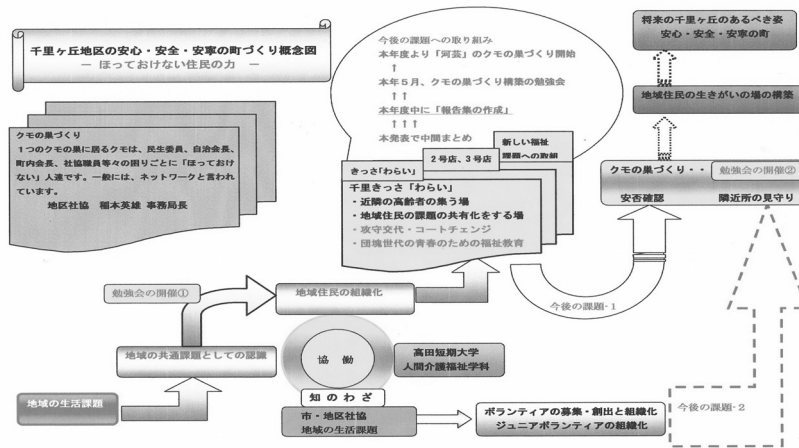


図-2 千里ヶ丘地区における安心・安全・安寧の町づくり概念図

正式に始まったことに起因する。図-2みられるように、ゴールは将来の千里ヶ丘のあるべき姿(安心・安全・安寧の町)を地域住民がどう描き出すだろうか。その一連の過程について考察したい。まずは、地域住民の発意である。自分達の住まう地域の生活課題を共有化し認識するところから始まる。その課題を、地域住民とともにNHKスペシャルの上映会という勉強会を持った。この後に地域住民と地区社協(市社協。支部社協)、本学との関係を円卓の中心に協働の概念を置き、地域住民の底力と社協、短大の円周上に描き出した。大凡、「→」で示されるのは、A~Bの関係性を意味する。数学的或いは物理的なベクトルは、方向と量をしめす。矢印で関係性を示すことは、本実践の要である関係性に方向と量がある事に違和感を持っていた。社協の伊藤さん、地区社協の稲本さんに提示し協議した際に、稲本さんがこの関係が問題だと三者の関係を○(丸)で指し示した。稲本さんが指摘した「○」、すなわち円周上にそれぞれが存在させる事に大きな意味を持つ。社協→地域住民、社協→短大ではなく円周上のいずれかの位置にそれぞれが立ち、相互関係を円周上に描き出せる関係が本実践の要である。本学科の存在もその円周上にある。学生ボランティア、健康教室の看護師、アコーディオンやハーモニカの演奏者、民生委員、自治会長等々関係するスタッフも同様である。千里ヶ丘のサロンが円卓にこだわる理由もそこにある。上座も下座もなくかかわる人たちの「知の力」出し合ってこそ地域の再生の姿が描き出される。描き出すのは社協でもなく短大でもなく、そこに住まう地域住民の一人ひとりの願う「普通の暮らしの幸せ」の姿であろう。社協は、今後のクモ製作の構築とジュニアボランティアの組織化の課題もあろう。短大は、活動を通して学生の地域福祉実践における視座のもとに福祉教育を通底し、個々

の学生の自己覚知がされ「人生福祉」を構築すべく自己変容を重ねるだろう。多感な青年期に多文化を持ち得る地域住民とかかわりの中で、自己を見つめて未来の姿を描き出そうとするのである。まさに多文化をもたれた地域住民をかけがいのない師と仰ぐ人に出会うこともあろう。この関係は、学生に限らず、中高年であっても小中学生でも地域住民を大切な人との出会いとして理解されよう。招く側と招かれる側の攻守交代もあり人の出会いの中にダイナミックな関係性が見つければ見つかるほどに相互の波長合わせが起こり、振幅は2倍にも3倍にも大きく振れ地域住民の底力が発揮されると確信する。

## まとめ

千里ヶ丘実践では、「わらい」というサロン活動を通して、地域に住まう人の環境を考慮し2号店、3号店を生んできた。そのような中で介護サービスを活用して生活をされる方々の何人かが集まり「お茶会」をされていることや、団地のある棟の方が、同じ棟に住むが故に「わらい」では話せない愚痴を語ろうと10人足らずの方々が「お茶会」をおこしている。「わらい」のように、たいそうなことをしなくても自分たちの思いや愚痴を言い合える場作りに変容している。「わらい」は当初より人との関係性を紡ぐ手段でありサロンをすることが目的ではなかった。「わらい」を通じて地域住民の手によるささやかなネットワークの構築を生み出し得たことは大変に重要なことである。「わらい」の実践が地域に住まう住民に「このままではいけない。自分ことに降りかかっている。」と言う沸々とした思いに火種となって関係性の構築に紡がれている。

地域住民と社協実践・短大等が、同一円周上の関係にあることはとても重要なキー概念である。ただし、インフォーマルな地域住民実践を見守り、津市に必要な財源等々を考慮したときに円周上に行政を位置づけなければならない。2000年以降、国が進めてきた基礎構造改革において福祉施策の基本構図の転換、「住民サービス」から「住民の支え合い」の可視化の実践である。基礎構造改革以後の公的サービスの不足を住民の支え合いで補完し、住民の支え合いで足りないところを公的なサービスで補う必要性を詳細に検証しつつ橋渡しの役割を担うのが社会福祉協議会における地域福祉実践であろう。制度を「公から民」へのパラダイムの転換に大きく舵を切った。しかしながら、基礎構造改革は民に可視化されぬままであった。「わらい」の実践は、「公から民」へのパラダイムの転換された実像を見いだせる実践として重要である。千里ヶ丘地区社協の取り組みは、心ある三重県内の社協職員に広がりつつあるのが現状である。当然、津市社協にも千里ヶ丘実践の営みが津市一身地区社協に伝播し検証される状況下にある。昨今の事業仕分けの手法が市区町村まで広がり、社協も例外ではなくなっている。市や県等の補助金のゲートキーパー的な業務を行う社協では、県や市からの補助金を社協ではなくNPOに委ねられてしまう。地域に住まう住民の支え合い実践の必要と社協が専門機関としてかかわり活動の調査・分析・評価を行い、行政に「もの申す社協」にパラダイムの転換が出来るかが試される時期である。「住民の支え合い」を円周上の一点にあるであろう「行政」もかかわるフォーマルサービスへ結び、紡ぐことが求められる。インフォーマルな小規模福祉活動を社協が、支援することを通底しながら行政に働きかけフォーマルサービスにつなげることができる実践力が求められる。

社協実践を振り返ってみれば、1970年代はイベント型であり、80年代は生涯学習（ボランティア活

動)、90年代には地域支援型(コミュニティケア)そして小規模地域福祉活動(地区社協)に移り変わってきている。まさに津市社協の専門性が問われる実践であるといえる。その根本には、人との関わりのかかわりであり、人との深まりである。

平成22年10月3日第33回河芸町老人福祉大会の大会宣言には、「戦後も65年を数え、いわゆる団塊の世代を含んだ高齢化時代が進む中、私たちは今、考えても見なかった問題の広がりを見せている。誰もが健康で生き甲斐のある生活を送ることができる社会を目指している中で百才以上の高齢者の所在不明や、何年も経て家族も知らなかった孤独死の事実など、社会を取り巻く環境や家族関係の希薄化が進んでいる。これらについて地域で孤立する高齢者をどう支援してゆくのが私たちの課題となってきた。一人暮らしの悲惨な孤独死、認知症、虐待など、これらの問題に対し高齢者としての知識と能力を以て「無縁社会を有縁社会にする」心豊かな社会を形成するため、クラブ活動や地域社会福祉団体との協働課題として取り組んでゆかねばならない。これからも私たちは変わることなく信頼しあって明るい希望のある時代を次世代と共に築くため、諸活動の一層の充実発展に寄与することを本大会参加者の総意において宣言する。」と大会会長、河戸義徳氏は述べている。地域住民が、「ほっておけない」課題に手立てを講じようとしている最中にも、53歳 男性、10月31日、戸建て住宅で白骨化し亡くなっているのを発見された。死因、発見者は不明である。本人は、母親と二人で暮らしていたが、平成19年に母親が特別養護老人ホームに入居した後、単身で生活を送っていた。交通整理の仕事をしていたが、生活費が足りず、兄弟から金銭援助を受けていたようだ。8月29日、横浜に暮らす兄が母親の面会に来た際、施設のケアマネに「本人と連絡がとれない」と地域包括の相談員に伝えられ、相談員は、河芸総合支所の福祉課に報告するとともに、兄から搜索依頼を出していただくようケアマネに依頼した。福祉課の職員がどう対応したか分からず、安否確認は行われていなかったようだ。本人は、近所付き合いがなく、近隣住民は空き家になっていると思われていた。また、80代 男性、11月8日、自宅で亡くなっているのを、民生委員から連絡を受けて訪れた長男が発見した。様子がおかしい事に気づいたのは、11月7日の敬老会の記念品を届けた自治会役員である。自治会役員は、8日の朝も夕方もないことを不審に思い、担当の民生委員に連絡をとる。連絡を受けた民生委員は、長男に連絡した。死因および亡くなった時期は不明だが、通院していたため、病死が疑われる。この方は、敬老会に出席することを葉書で返信していた。記念品の配布がなければ発見がさらに遅れたものと思われる。いずれも誰にも看取られることもなく無縁死となった。新聞にも掲載されることもなく無縁死は、何処でも起こりえる地域生活上の大きな課題である。

千里ヶ丘における「わらい」のささやかな実践から、老人福祉大会の大会宣言にあるように老い豊かに生きる人たちも課題の認識が広がっている。傍らでは、少人数でささやかな「お茶会」が行われたことは、地域に住まう人に共通の生活課題であることを意識化されている。「わらい」というサロンをすることを目的ではなく、手立てとしての取り組みが地域に住まう人々に広がり、地域に住まう人たちの手で確かな小地域福祉活動実践がされると同時に、招く側と招かれる側の相互の間で個別的な生涯教育(福祉教育)がされている現状である。

参考文献

- (1) 福祉・教育を考える 澤田健次郎 監修 村上尚三郎・間哲朗 編著 2010年刊 久美出版
- (2) 文藝春秋 11月号 -NHK「無縁社会」二万二千人の「死の記録全公開」- 2010年刊 文藝春秋
- (3) こどもと学ぶボランティア 鳥居一頼 2008年刊 社会福祉法人大阪ボランティア協会
- (4) 学びその死と再生 佐藤学 2001年刊 太郎次郎社
- (5) 福祉・教育を考える 澤田健次郎 監修 村上尚三郎・間哲朗 編著 2010年刊 久美出版
- (6) カウンセリングの理論 伊藤博 訳 1964年刊 誠信書房
- (7) 街場の教育論 内田樹 2008年刊 ミシマ社
- (8) おせっかい教育論 鷺田清一・内田樹・釈徹宗・平松邦夫 2010年刊 140B
- (9) フロント構造の哲学 八木誠一 1988年刊 法蔵館
- (10) 場所論としての宗教哲学 八木誠一 2006年刊 法蔵館
- (11) 本当の生き方を求めて 八木誠一 1985年刊 講談社新書
- (12) フロント構造の哲学 八木誠一 1988年刊 法蔵館
- (13) ベリクソン 篠原資明 2006年刊 岩波新書
- (14) 介護の思想 増田達郎・山本誠 編者 2004年刊 久美出版
- (15) 介護の福祉 増田達郎・山本誠 編者 2004年刊 久美出版